

本居宣長記念館所蔵医書について

—元禄十年刊『本草摘要』など—

吉川 澄美

東京都

本居宣長記念館には宣長が購入・使用した医書や自筆の医学関係文書等が保管されている。宣長自身の著述以外は35点程度、例えば、『素問』（九卷四冊）、『靈枢』（九卷三冊）、『新刊素問入式運氣論奥』（以下『運氣論』二冊・刊記正徳五年）、『傷寒論』（一冊・享和元年再版）、『金匱要略』（一冊・天明八年再刻）、『傷寒訳通』（一冊・天明四年刊）、『医方大成論』（一冊・延宝七年刊）、『十四経発揮』（二卷二冊）、『十四経穴歌』（一冊・写）、『揆穴会志』（一冊・写）、諸脈論（一冊・写）、『古今方彙』（一冊・延享二年刊）、『古今幼科摘要』（一冊・跋宝永六年）、さらに本草関係では『本草綱目』（六十一卷四十五冊・刊記正徳四年）、『大和本草』（二十五冊・刊記正徳五年）、『本草序例』（一冊）、『本草摘要』（一冊・元禄十年刊）がある。また『東垣十書』や『婴童百問』など購入録に記されるも散逸本もある。『素問』『靈枢』（両者は所謂「類経本」）、『運氣論』、『本草摘要』には宣長の書入れが確認でき、中には「堀云」という記載から師の堀元厚の講義を踏まえたものだと想像できる。堀元厚は小川朔庵に師事し味岡三伯に連なる医学の講積を得意とした一門に属す。当門の講義録としては、小川朔庵の兄弟弟子、浅井周伯の講義を松岡玄達が記した写字台文庫本があり、相互に比較する事によりその輪郭や時代的な変遷を知ることができ、その意味でも宣長の書入れ本は貴重な資料価値があろう。

今回は、元禄十年刊『本草摘要』に注目してその特徴を検討してみる。本書は主に『本草綱目』等の抜粋から成り146種の薬味を挙げている。宣長の書入れは和名や別名、そして選別についてのものが多い。例えば茵陳蒿は「唐ヨシ、倭ニ松デ杉デト云アリ、松デハ偽物也、杉デト云ガ真ノ茵陳也」、紅花は「薬店ノ紅花ハアシシ、アカキヲヨシトス、黒キハアシシ」、菊花は「味甘キヲヨシトス」、牛膝は「唐——ヨシ、倭に偽物アリ、真ノ——ヲエラムベシ」、大黃は「唐ヨシ、倭の大黃ト云ハ羊舌根也、大黃ト同類異種也」、黃連は「倭ヨシ、加州最モ佳也、菊ヨウ、芹ヨウトテ二種アリ、薬店ニテ上ミガキ中ミガキナト云シナアリ」等々産地についても言及し、薬店を介した流通の一端を知ることができる。

尚、本書は『本居宣長記念館善本目録』には「馬瀬道三著」と記されているが、これは誤り（仮託）で元は『本草抜書』と題して味岡一門に伝わっていた写本を浅井周伯が加筆して刊行したものである。また、すでに真柳誠が指摘しているが同名の漢籍があり、国書総目録には著者：兪汝言も混在するが元禄十年刊は浅井周伯が編纂したものである。

さて、元となった『本草抜書』と比較すると、この刊本には性味に関する加筆があり「経無微寒二字」（茵陳蒿）、「（辛）経無」（葛根）、「経無平字」（薯蕷）、「経無苦字」（杏核仁）、「経無甘字」（桃核仁）等々である。『本草抜書』における性味は当門の『薬性記』の性味の由来を記していると解せるが、若干誤写もある。刊行に際しては文献的な正確さが配慮されたとうかがえる。残存する『本草摘要』の中には研医会、岩瀬文庫（堀元厚講）、家政学院大江文庫など積極的な書入れが確認されており、さらに「ゴザル」の文体で講義を綴った『本草摘要口義』（杏雨植考、国会白井）や、『本草抜書』を表題に掲げて講義録も交える加賀文庫や刈谷文庫などの写本も鑑みるとこれら「本草抜書系文書」は江戸時代中期を中心に少なからず行われたと推察できる。その背景としては江戸時代日本の状況下での実用的な講義の需要があったと思われる。そして、本系統の文書は『本草綱目』の抜粋や講義資料としてのみ独立に扱われるだけでは不十分で、味岡門の「薬性記系文書」「漢文・薬性知源系文書」「和文・薬性知源系文書」と併せてその関係性を踏まえながら検討される余地があろう。